

科学研究統制の問題

石原 純

近ごろでは統制ということがすっかり常識的になつてしまつたほど、我々の眼のまえで行われている。それに伴つて何事につけても統制を行わなくては、ただの一步でも真直ぐに前進することができないと考えている人々も大分あるようである。なるほど政治や経済の上では、今はいかにしても統制を缺くことができないように見える。併しそれと同じことが果して文化的な仕事の上にも言われるであらうか。これは一つの真摯な重大な問題であると思ふ。

統制そのものの意味については、私は以前に詳しく説明したことがあつた。そして本当の意味での統制、つまり統制がその目的とする効果を十分に挙げることのできるようなものは、すべて事物の自律的関係を生かすようなものでなければならぬので、實際に之を行ふには、よほど慎重な考慮が必要であるということを注意した。自律的な関係が阻害されて、徒らに他律的にのみ動かさうとするなら、そこには何かの無理が生ずることを免がれないので、この無理が嵩ずれば、遂には破綻を来すことになるのは当然であるからである。恰かもそれは何かしらの故障によつて自律的には動かなくなつてゐる機械を無理にでも働らかさうとすれば、機械は破損するより外はないと云うのと同様である。だから、或る事物に対し統制を行おうとするなら、この事物に於ける自律的関係がどんなものであるかを、先ず十分に見究めておかなくてははいけない。そうでないと、取り返しのかない失敗が起らないとは云われないのである。

ところで、普通に統制を行うのは政府当局者である。政府当局は云う迄もなく直接には政治に対する責任をもつべきであるが、間接には之これにかんれん関聯するあらゆる事項を考慮しなくてはならない。従つて文化に關しても政治と相繫つながる限り之これに關与すべきであるが、この際に政府自身が必ずしも文化的な仕事そのものに携わるわけではない。私わはここで主として科学について語らうと思うので、事柄を局限して云うことにするが、科学研究は現在なお一般の人々の手に委ゆたねられている。勿論もちろんそのなかには政府に所属する官庁に於て特殊な目的をもつて行われているものも多数にあるが、広く文化的な意味に於ける科学研究は、政治とは独立していると見てよいであろう。そこで併しかし科学研究に対して政府が何等なんちかの意味に於て統制を行う必要を認めたとしたなら、その際に先まず第一に科学研究のどれだけの範圍に対して之これを行うべきかを正しく見定め、第二には、かような科学研究に於ける自律的関係が何であるかを明らかにして、之これを阻害しないように努めなくてはならないのである。そうでなければ、せっかく科学研究を眼指しながら、併しかしその十分な成果を期することができないと云う迷論的な事情を結果するに終るであらう。

さて科学研究に対して統制を行う必要のある場合は、自然科学の範圍では云う迄もなく直接に實用にかんれん關聯している応用方面の仕事である。之等これらに關しては、現在に於て国家に対し何が最も緊要とされているかを政治的に判断して、特に、かようなものを研究することを科学者に要望すべきは当然である。従つて之等これらの研究に適すると見られる科学者に対してその研究を依囑するのは、この種の統制の重要事ではなければならぬ。併しかしながら科学研究は、何等なんちの意味に於ても政治的又は社会的の事務とは異なつていて、一つの知的な仕事である。事務は統制の対象となることができ、知的能力の發揮はそうはゆかない。従つて之これをすべての人に差別なく課することができないばかりでなく、その努力を十分に獲得しようとするためには、自ら好んで之これに従事しようとする人々にのみ任じなくてはならない。つまり、この場合に於ける統制というのは、たかだか、かような適任の人々を選んで、専心に研究に従わしめ得るようになると云うことに止まらなくてはならないわけである。

ところが世間には、この場合にもそれ以上の統制を強行すべきことを主張する論者がある。そこでは一切の科学者を徴用して、それぞれ一定の題目を課してその研究に従事せしむべきであるとしている。之は甚だ極端な主張でもあるが、およそ之ほど科学研究の自律性を無視したものはないであろう。これでは科学研究を事務と同じように心得ているのである。尤も或る特殊な研究は誰にも向かないわけでもないかも知れないが、万人向きの科学研究など云うものは、寧ろ科学研究と名づける程の価値のないものに属しているのである。本来の科学研究は特殊な人々にのみ可能なのであり、しかもその上に研究題目は当事者の意志によって選択せらるべき筈のものなのである。勿論その選択は或る程度の範囲内では、事情に依じて、かなり左右することはできるであろうが、ともかくも他から勝手に強要するなどは不可である。このような強要を敢てして科学研究を行わしめようとする程、誤ったことはない。それはせつかくの彼等の才能を見殺しにしてしまう点で、人的資源に対する国家の大きな不経済を敢てするものでさえある。之は寧ろ大いに慎しむべきことではあるまいか。

科学者のなかには、応用方面以外の謂ゆる純正科学の研究に従事している人々も尠なくはない。純正科学は寧ろ科学としての本来の道であり、あらゆる応用も之に基づいていることに就いては、改めてここに説く迄もない事柄である。ところが、かような純正科学の研究などは、現時の我が国家にとっては不念事であるという理由で、之等の或るものを中止せしめたがよいと説く人々がある。しかも、それがさき頃ある有力な応用科学者によつても主張されているのを見て、私は甚だ驚かされた。この事については私は他に詳論した（「現時局と純正科学の問題」）から、ここでは繰り返さないが、国家が目前の危機に迫られて一切の科学研究を放棄しなくてはならないとでも云うのでない限り、純正科学の研究の一層必要であることを切実に思わないわけにはゆかない。

要するに、科学研究には、それがどんな種類のものであろうとも、知的能力の存分な發揮が必要とされるのであるから、統制者の側から見て、之をそのまま統制の対象としてはならない。そうすることは即ち科学研究の自律性

を阻害することになる。そこで政治的の意味での統制に於ては、どんな種類の研究が国家にとって最も要望されているかを明らかにして、科学者自身の意志に従って事情の許す限りこの要望に応ぜしめるということが、その目的とされなければならない。統制がこれ以上に出る場合には、恐らく科学研究の正常な効果をさえ抑止してしまうに至るであろう。

之これに対して科学者の側から見れば、勿論もちろん、出来得るならば政府当局によつて要望されている緊急な研究に従うのがよいに違いない。併し今日では専門の分岐が極めて多くなつているので、俄わかかに之これを変更するのは困難であるし、また無理に変更したところでよい効果が望まれないとすれば、やはり各自の最も得意とする処に止まるのが結局はよいことになる。まして科学研究の成果というものは、予め誰にも測り知られないので、いろいろな研究を行つている中には、現に要望されているものより更に意外なよいものが現われて来ないとも限らないのである。また科学研究は余りに近視眼的に目前の事のみ捉とらえられていては、大きな成果の得られないことも確かである。国家の将来が永遠のものであるとするなら、何もすべてが目前の事物に縛られている必要もないのである。だから現時の勢いきほのなかにあつて、しかも現在を遙はるかに超越すると云うことも、一つの大きな意味をもつことを考えておかななくてはならない。ところで近頃、科学者の研究に関して、こんな議論を行つている人があつた。それは簡単に云えば、科学者といえども、その社会的環境のなかにおかれた一員であるから、先まず彼自身の研究がその社会にどんな結果を持ち来すかをはつきりと見究めた上で、その研究に従事すべきであつて、この事を怠つて勝手な研究に携たすわつてゐるのは、謂いわゆる自由主義の残滓ざんしに外ならない、と云うのである。これはどうも大分混線している議論であると思ふが、中には一層そこに捲き込まれる人もないでもあるまいと考えられるから、少々明瞭に科学的分析を行つておくのも無駄ではないであろう。

先まず科学者が社会や国家の一員であるということには異論はない。そしてかような社会や国家の一員がその社会

や国家のためによい仕事を心がくべきであると言ふことも、今さら繰り返す必要もない。そこで彼が科学の研究を行ふということは、知識をそれだけ開発させるということ、それがどんな種類のものであるにしても、何等かの効果を挙げていることは確かであるから、之を非難する理由は少しもない筈である。その題目が自由に選ばれたということ、自由主義と結びつけるなどは、大分的外れの嫌いがある。近頃では何でも自由ということが、妙な眼で見られる虞れがあるが、之についての議論は少し横道に入るから、ここでは敢て省いておこう。ともかくも科学研究の題目を自分の意志で選ぶということは、前にも述べたように、科学研究そのものにとつて必要であり且つ効果があるからであつて、之に對して何も自由主義を持ち出すには及ばない事柄である。

次にこの研究が社会にどんな結果を持ち来すかということなどは、それは科学者が研究を始める前にいくら考えたところでわかる筈のものではない。尤も或る場合には、多少の見当もつくかも知れないが、それにしても良い方面を見ればよいので、わるい方面を見ればわるくなる。社会に於て之を善用するか悪用するかは、実際の使い方の如何にあるのでそれは断じて科学者の知つたことではない。今日の科学文明の弊害は、屢々話されているけれども、之等は本當を云えば人間がその利便に眼がくらんで、むやみに使い過ぎるからである。恰かも或る薬がよく利くと云つて、それを飲み過ぎとして中毒にかかると同じことである。中毒にかかるとは薬がわるいのではなくて、その使い方を誤まるからである。科学文明にしても、それ自身がわるいとは云われないのは確かである。否、わるいどころではなく、余りに効能があり過ぎるから、うっかり使い過ぎて中毒に陥るのである。そう考えるならば、どんな科学研究にしても、科学者が之を行つてわるいと云ふことは云われない筈である。科学者は之によつて我々人間の知識を増してゆくので、それだけの立派な効果のあることは否定せられない。ただ社会的に之をいかに用いるかは、使用者自身が慎重に考察しなくてはいけないのである。

これほどの事柄は甚だ平凡な理窟に過ぎないが、それすら今日では統制とか自由とか云う問題に關聯して、妙にゆ

がんで解釈されるのである。統制や自由ということにはそれぞれの価値があるのであるが、それが謂わゆる主義になつてしまうと、具体的である代りに抽象的になるので、そこにいろいろの弊害が現われて来る。これも上に言つた中毒の一種である。我々は何事も中毒にかからないだけの十分な用心をして、それを使うことが肝腎である。要するに科学研究の統制ということに関しては、科学研究の自律性を失わしめないことがくれぐれも大切であることを忘れてはならない。

(昭和十四年六月)

- 底本には、『科学のために』（科学主義工業社、一九四一（昭和十六）年一月二十五日）を使用した。
- 読みやすさのために適宜振り仮名を追加した。
- 旧漢字は新漢字に、旧かな使いは新かな使いに変更した。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセットを行い、 $\text{dvi}2\text{pdf}^{\text{m}}\text{x}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。